

## 『岐路灯』に見る清代中国の身分感覚

岸本美緒\*

### 1. はじめに

『岐路灯』は、清朝中期河南省河南府新安県の人、李海観（号は緑園、1707-1790）の著わした長編小説である<sup>1</sup>。李海観の祖父・父は下級知識人（生員）であったが、彼自身は30歳で挙人に合格した。しかしその後、数回にわたり北京で会試を受験するも失敗し、中小地主としての生活を送った。50歳ではじめて出仕して全国各地の小官を歴任し、最後は貴州府印江県の知県となるが、在任一年程度で、68歳で帰郷した。このように、李海観自身の官僚としてのキャリアには特筆すべきものはないが、次男の李蘧は進士となって順調な官僚生活を送り、廉潔を以て名声を得た。

『岐路灯』は、李海観の42歳から50歳にかけてその主要部分が執筆され、官僚生活を終えて帰郷したのち、3年ほど書き継いで、71歳のときに完成したものである。『紅樓夢』や『儒林外史』とほぼ同時期の著作であるが、清代を通じて出版はされず、写本として広まった。最初に出版されたのは1926年で、思想家の馮友蘭が妹の沅君とともに最初の四分の一程度に校勘・標点を加えた石印本である。活字版として全体が出版されたのは、欒星校注の1980年中州書画社版が最初であり、現在の研究は主にこのテキストに拠っている。『岐路灯』には、子弟の遊蕩を戒める教訓的言辞がしばしば見られるため、20世紀の革命の時代には「封建礼教」の側に立つ陳腐な小説とされ<sup>2</sup>、長

期にわたり「埋没」してきた。しかし、市井の多様な人々の群像を細密な筆致で生き生きと描き出している点で出色であり、市井生活を描く「百科全書式」小説（欒星）とも評されている。当時の様々な社会階層の人々に対する士大夫層の一般的身分感覚を窺う上では、好個の文献といえる。

本稿は、この『岐路灯』を題材として、当時の身分感覚を分析することを目的にする。

### 2. 先行研究

『紅樓夢』や『儒林外史』に関する研究の蓄積に比較すると、『岐路灯』に関する研究は、歴史も浅く量も少ない。その本格的な研究は、1980年に欒星の校注により全文が出版されてから始まったと言えるだろう。1980年代には、著者李海観の経歴などに関連する諸史料を収録した『岐路灯研究資料』が出版され、またそれまでの『岐路灯』関連論文を集めた『岐路灯論叢』2冊が編集された。これらは河南を中心とした動きであったが、1990年代以降、中国、台湾、シンガポールで『岐路灯』を対象とする中文の研究書が8冊ほど出版されており、1990年以後中国大陸で発表された中文期刊論文で題名に『岐路灯』を含むものは、CNKI論文データベースによると174点以上。漢語圏におけるこれら従来の研究を大きく分類すると、以下のように分けられるだろう。第一に、著者李海観及びその思想（教育思想、社会思想など）に関するもの、第二に『岐路灯』の内容に含まれる社会風俗に関するもの（演劇、賭博な

\*お茶の水女子大学大学院教授

ど)、第三に『岐路灯』で用いられている河南方言を中心として、その語彙などを扱う語学的な研究、である。

一方日本における『岐路灯』研究としては、演劇に関する小山裕之の論文、及び李海観の著述意図の解明を目指した辻リンの論文があるが、数は極めて少ない。翻訳は未刊行であるが、小山裕之のホームページに同氏による『岐路灯』の全訳が掲載されており、本稿でも大いに参考にさせていただいた。<http://yuzhi68.web.fc2.com>

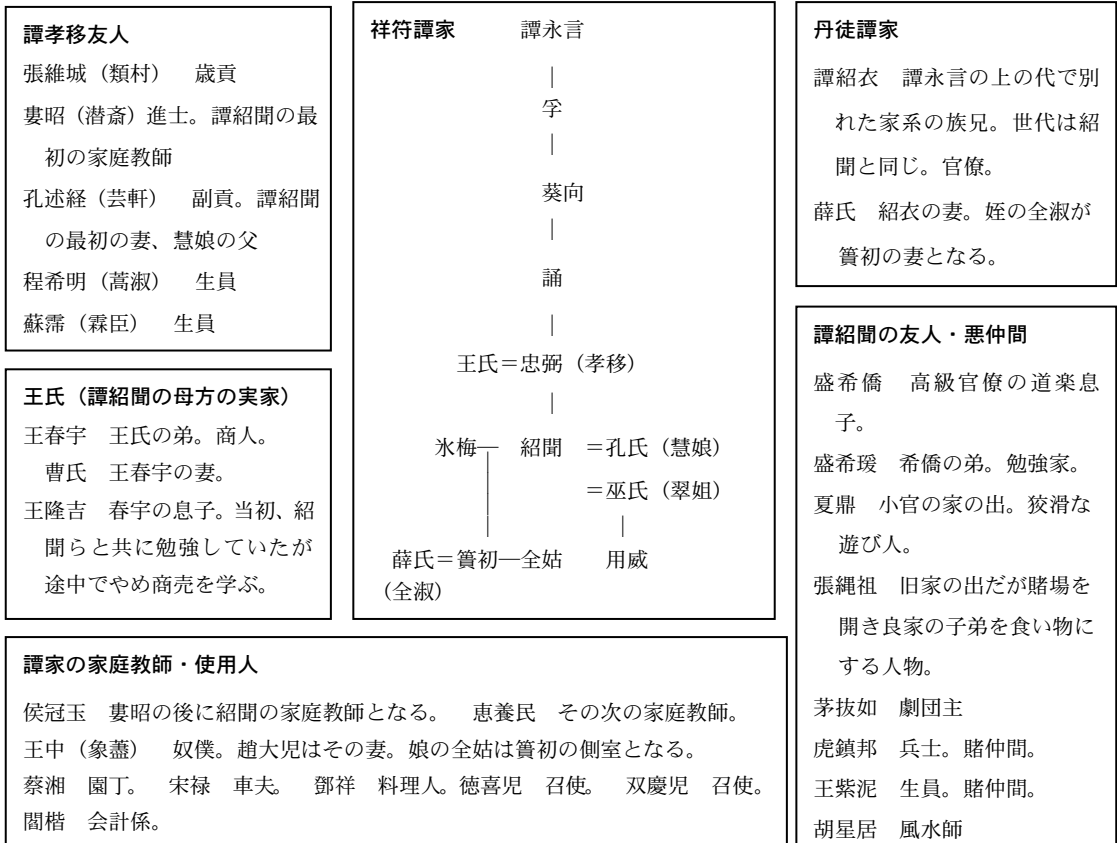
本稿で分析しようとするのは、当時の社会風俗そのものではなく、また著者の「思想」というほど体系化されたものでもなくて、当時の社会に漠然と共有されていたと思われる「身分感覚 (sense of social status)」である。中国の研究にせよ、日

本の研究にせよ、当時の現実と著者の思想をやや明確に切り分けすぎる嫌いがあるように思われるが、むしろ、小説に描かれる世の中の姿は、当時の人々(著者を含む)の日常知によって構成されたものであることを忘れてはならない。「身分感覚」の概念については、不十分ながら、岸本の一連の論文でその概略を明らかにした。

### 3. 『岐路灯』の梗概

『岐路灯』は全108回の章回小説で、約70万字、登場人物は二百余人に及ぶ(欒星による)。その梗概は以下の通りである。明代中期嘉靖年間のこと。河南省開封府祥符県の蕭牆街に住む譚忠弼(字は孝移)は、祖先が江南丹徒県出身の官僚で、

図 『岐路灯』登場人物関係図



河南に移住してから四代目、「書香の家」（知識人の家柄）で代々生員（科挙受験資格の保有者）となっていたが、彼自身は「人となり端正耿直、学問醇正」であったにもかかわらず、郷試（生員が受けることのできる試験で、科挙の第一段階）に何度も失敗し、受験をあきらめて、地主知識人としての生活を送っていた。最初の妻は早く亡くなり、後妻として迎えた王氏は、父は生員だが既に死去、実家の弟の王春宇は、やり手の商人であった。年を取ってから生まれた一人息子（譚紹聞）は、眉目秀麗で頭もよく、夫婦とも彼を溺愛していたが、孝移が紹聞を厳しく教育しようとするのに対し、王氏は彼を甘やかす傾向があった。孝移は信頼する友人の婁昭に紹聞の家庭教師を頼み、厳しく指導してもらっていたが、孝移が特別推薦をうけて北京に行っている間に、婁昭が郷試に合格して官途につき、王氏が弟の紹介で頼んだ代わりの家庭教師の侯冠玉は、いい加減な人物で、紹聞は次第に勉強を放擲し、遊び好きとなっていた。孝移は北京で病気になり、帰郷早々に、忠義な奴僕の王中に紹聞の世話を頼んで死んでしまう。

王中は孝移の遺言通りに、紹聞を正しい人間に育てようと心を砕くが、他人に流されやすい性格の紹聞は、名家の道楽息子の盛希僑や無頼漢の夏鼎らに誘われるまま、賭博や贅沢にのめりこみ、多額の借金を作り、さらにその借金を返そうとして深みにはまってゆく。世間知らずの良家の坊ちゃんを食い物にしようとする不良たちの様々な手口に紹聞は翻弄され、賭博がらみの紛争事件の被告として裁判沙汰に巻き込まれたり、不倫沙汰で脅迫されたり、錬金術師の詐欺にあって大金を奪われたり、など次々に窮地に陥り、ついには自殺未遂に至って、譚家の財産は失われ、家の名声も地に落ち、譚家は崩壊するかと思われた。しかし、根はまじめな小心者である紹聞は、譚家の没落を心配する亡父の友人たちの援助や、硬骨漢の義僕の王中の奮闘、心ある地方官たちの配慮によって、かろうじて危機を脱し、悪友との関係を

絶って質素な生活に戻り、再出発する決心をする。

紹聞が妾（お手付きの女中）の氷梅との間に設けていた男の子（簀初）は利発な子供で、紹聞と簀初はともに勉強に励み、童試に合格して生員となり、科挙合格をめざした。丹徒に住む譚氏の一族の出である譚紹衣は、有能かつ清廉な官僚で、河南に赴任した際に紹聞の能力を見抜き、その後自分が浙江巡撫となった際に、倭寇討伐の担当官として紹聞を抜擢する。様々な苦労を経て胆力や知恵も備わってきた紹聞は、倭寇討伐で手柄を立て、皇帝に引見される。紹聞はその後、浙江省黄岩知県に任ぜられたが、母親が老齢のため官を辞して帰郷した。譚家復興の最大の功労者ともいえる王中に紹聞は深く感謝し、奴僕であるにもかかわらずその娘の全姑を簀初の正妻に迎えようとするが、譚紹衣からも妻の一族の娘（全淑）と結婚させたいとの話があったので、結局、簀初は全淑を正妻に、全姑を妾とすることになる。結婚後まもなく、簀初は進士（科挙の最高段階）に合格し、妻と妾の仲もよく、譚家は再び地方の名家として人々の尊崇を受けるようになったのであった。

#### 4. 分析

##### (1) 明清時代の「身分」制度と『岐路灯』

明清時代の身分関係として、法律上定められている主なものとしては、以下の三者がある。即ち、①官ないし紳士（科挙合格者・科挙資格保有者・官職経験者）と民との関係、②主一僕の関係、③良一賤（奴婢、芸能者、役所の下役など）の関係。これらは、近世日本のように世襲を原則とするものでなく、科挙合格や賤業従事といった当事者の行為によって定まる、基本的に流動的な身分である。また、これらの身分カテゴリーにつき、法律上の客観的基準は一応あるが、社会的には、より漠然とした「らしさ」も人物評価の基準になり得る。制度的な地位と人格の品位とのずれが、しばしば小説や戯曲、ひいては一般的な噂話などの題

材となる。

「身分感覚」史料として『岐路灯』を見た場合、第一に興味深いことは、本小説が、上昇と没落のはざまにある「下層紳士」の危機感を色濃く表出していることである。明末の史料には、「郷紳が一たび死んだあとは、子弟の淪落する者、辱めを受ける者、漂流する者、身売りする者、徭役に苦しめられる者が枚挙に暇ない」（16世紀末、松江、范濂『雲間抛目抄』）といった記述がしばしば見られるが、『岐路灯』もその第一回で次のように述べている。

人の世にあつては、しよせん成立（一かどの家として自立）するか覆敗（没落）するかのどちらかに過ぎませんが、その成立・覆敗の分かれ目は少年時代にあるのです。おおむね成立する人は、風貌は立派で性質は温厚、幼いときから家で厳格な教えを受け、往来する親戚や交わる学友も、すべて真面目な人々、従順な子弟です。たとえば樹木の根が本来深く根付いていて、そこに水や肥料を加えてやれば、後に自ずと繁茂するようなものです。覆敗する人は、早くから感覚が浮薄で気質は軽々しく、父兄の教訓を聞いても石の上を流れる水のように、全く頭に入りません。彼らは、真面目で老成した先輩に会えば、針のむしろに座ったようで、一刻も耐えられませんが、不良少年たちに会えば仲よく往来します。将来必ず一敗地にまみれ、救いようがなくなることは明らかです。このため古人は「成立の難しさは天に登るが如く、覆敗のたやすさは毛を焼くが如し」と言いました。この語を口にする者は心を痛め、聞く者は自ずと骨に刻むべきものです。その実、父兄はみな心を痛めているとしても、それを骨に刻んで聞く子弟は寥々たるものなのです。（1頁）

このような危機感からして、『岐路灯』では、没落しない方法についてくりかえし議論がなされるが、それは、表面的な要領の良さや頭の良さで

はなく、結局は真面目さ、道徳性に帰着するものであることが、再三強調されている。

「身分感覚」に関わる『岐路灯』の第二の特徴は、本小説の副主人公ともいべき義僕王中の描き方である。義僕が放蕩息子のために粉骨碎身し、正しい道に導くというモチーフは、李海観の独創ではなく、明末清初の小説から借りてきたものであることが既に指摘されているが（劉洪強 2010等）、直情径行の硬骨漢王中と、彼が正しいことを心の中では認めつつも素直になれない若主人譚紹聞の関係が生き生きと描かれており、当時の主僕関係のはらむ多義性がそこに映し出されているともいえよう。

そして第三に、『岐路灯』の魅力は、そこに描かれた都市雑業層の躍動的な群像にある。俳優、妓女、幫間、門番、衙役、兵士、博徒、僧尼、風水師、贖金づくり、といった人々である。これらの人々のなかには、法律上「賤」と規定される者もあれば、そうでない者もいるが、総じて彼らは、良と賤との間の曖昧な境界に身を置く存在といえる。そして本小説では、世間知らずの良家の子弟である譚紹聞が、彼らを賤しい存在と見なしつつも、したたかな彼らの生活力に対して感じる気おくれ、また、彼らの側が譚紹聞らに対して感じる羨望と侮りの入り混じった感情、といったものをニュアンス豊かに描き出している。

このように、『岐路灯』は期せずして、明清時代の身分制度の主要な三側面（紳—庶、主—僕、良—賤）を総合的に描写する小説となっているのである。以下の諸節では、この三側面に即して、その身分感覚をさぐってみたい。なお、「身分感覚」の分析に当たっては、抽象的な身分論のみならず、身分的上下感覚に関わる、様々な具体的な行動様式や小道具——呼称、名刺、贈り物、しぐさ、言葉づかい、等々——が重要であるが、これらについては、今回は紙幅の関係上、触れる余裕がないため、下記の引用に見える範囲で適宜言及する。

## (2) 書香の家——官と民（士と庶）

第一回の譚家の家庭環境の説明で「譚永言が官僚になって以後、譚孝移に至るまで四代、ともに書香を受けつぎ、県の学校に名をつらねました」とあるように、知識人の家柄は「書香」という語で表わされる。譚孝移（紹聞の父）は、郷試に合格できず、地方の地主として生活していたが、「詩や文を作ることは依然として好んでおり」、「真面目で学問のある友人たちと、花や月を愛でたり、詩を作ったり、清談をしたり、酒宴をしたりで、一月に三、四度は会っていました。……学校に籍を置く紳士の中には小人と付き合う者たちもいて、彼らは孝移らを敬遠し、迂板（時代遅れ）とか古怪（変わり者）と言って笑うのでした。」（第一回）

「書香」の反対語は「銅臭」（銅銭の臭気）と言えようが、その対比はそれほど単純ではない。孝移の友人たちが俗物論を展開する場面で、齒に衣きせぬタイプの程希明は、友人の一人の婁昭について「ことさらに理学（儒学の哲学的議論）を論じなくても、日常の行為のなかに理学の精神が貫徹していた」と称揚しつつ、世の学者を批判する。「理学を論ずる連中は、貧乏な生員であった時代は、家を治めることもできず、幸い科挙に受かった後には、昇進と蓄財のことしか考えません。……さらに嫌なのは、彼らは孔孟とか程朱とかしか言わないくせに、それは口先だけで心では真面目に考えていない。つまり、孔子孟子を後ろ盾に飯を食っているだけで、要するに経書中の虎の威を借る狐ですよ。……口では理学、心では銀錢というわけだ。官印を手にしながら心は錢の事ばかり、書香を銅臭に変えてしまう、まったく厭になりますね。」（第三九回）

道徳的仮面のもとで利益を追求する偽善的学者への批判は、当時耳慣れたものであったといえようが、それでは商人についてはどうであろうか。譚孝移の妻の弟である王春宇（商人）が、孝移と婁昭を宴会に招いた際、春宇が溜息をついて言うには、「亡き父は在世中、府の学校のお仲間であ

りましたが、私に至って素質が及ばず、書物も捨ててしまっ、商売に身を落としたので、人前をはばかり、人様の前にもあまり出なくなったのですよ。……今日は姉の夫の体面を借りて、やっと婁先生のご光臨を仰ぐことができたのです。」孝移「ご謙遜を！」。婁昭「士農工商はいずれもまっとうな職業です、どうして恥じることはありませんよ。」（第三回）本小説のなかで最も良識的な人物の一人として描かれている婁昭の言葉からすれば、まっとうな商人は利益を追求するといっても、それは「銅臭」といった語で非難されるべきものではない、ということになる。むしろ「銅臭」とは、道徳を利益のために利用して恥じない卑しさ、即ち一種の道徳的ニヒリズムに対する嫌悪感を表す語といえよう。

このような卑しさが子供に染み付くことへの恐怖は、第一一回、譚孝移の北京滞在中に雇われた新しい家庭教師の侯冠玉と帰郷後の譚孝移の会話にも示されている。

孝移「端福児（紹聞）は五経の勉強をちゃんとしておりますか。何冊分講義をされました？」冠玉「今の試験は、五経は一つ選択すればよいのです。……早く学校に入って優等を取ろうと思えば、たくさん文章（模範答案）を読めばよろしい。千篇余りも読めば、まねができるようになります。」孝移「経書の研究は世の中に役立つためであって、科挙に合格するためだけのものではありません。たとえ科挙に合格するのが目的だったとしても、経文を読んだことがなければ、言葉に根底がありません。」冠玉「模範答案をたくさん読みさえすれば、俗にいう『よい詩を三千首読めば、作れなくても盗作はできる』というもので、真似はできるのです。……出来合いの食事があるのにそれを食べずにわざわざ食事を作ろうというんですか？大相公（紹聞）は頭がよくて、猫を見て虎が描けるのです。ちょっと見ただけで真似ができるんです

よ。」……孝移はうなずくふりをしながら密かに思った「私の子を殺す気か！」孝移が息子をよく見ると、机の前で無理に本を朗読してはいるものの、顔には全く書気がありません。おおそ学生が読書をすれば、色は黒くても優れた気がただよい、読書をしなければ、たとえ白いきれいな顔でも油気がしみつくものです。これは自然にそうなるのです。

譚孝移は確かにこのような卑しさを嫌う良識人として描かれているが、それが一種の強迫観念とまでなっているところに、その人物造型の特色があるといえよう。彼は息子が日暮れまで隣家の子と遊んでいただけで怒り狂い、たまの祭礼に息子を連れて行って息抜きをさせようとする妻の王氏にも反対する。

孝移「子供が祭りに行って何のいいことがあるものか、やめなさい。」王氏「あれもだめ、これもだめといたら、お祭りに行く人などいなくなりますよ。私の嫁入り前、お父さんは厳しい人だったけれど、三月三日にはお母さんに車で私をつれてゆかせたものですわ。」孝移は思わず笑って「婦女が祭りに行くなんで、お義父さんのよい家法だとはいえないね。……私は祭りの場では、真面目な読書人やちゃんとした教育を受けた子弟など見たこともない。定職のない者や博徒、畜肉業者や酔っ払い、それから不肖の子弟が騒いでいるだけさ。だから子供に行かせたくないんだ。」王氏「あなたお祭りにいらっしゃらないのに、どうしてそんなこと知っているの？」（第三回）

本小説を通じ、王氏は子供に甘い愚かな母親として描かれているが、ここではむしろ譚孝移の頭の固さが強調されているといえよう。

結局、譚孝移は子供の行く末を心配するあまり、気鬱が昂じて病気になる、紹聞が13歳のときに死んでしまうが、そのときの遺言は「用心読書、親近正人（熱心に勉強し、正しい人と交際する）」

という八字であった。「お前はこの八字をきちんと守りさえすれば、祖先の名を輝かすことはできなくても、家を没落させることはない。たとえ家を盛んにし功績を立てることはできなくても、財産を失うには至らない。……大きくなったら私を葬って、毎年墓参りのときに、私の墓の前でこれを一遍唱えなさい。わかったね。」（第一二回）

紹聞はこの教えを守らず、家を没落の危機に陥れるわけだが、ただ、このような「学者バカ（読書的憨瓜）」としての孝移の愚直さは深部において紹聞に受け継がれ、それが結局彼を救った、というのが本小説の眼目である。

「老实（実直）」とは、俗人から見れば、愚かという語と近く見えるかもしれませんが、識者からみれば、誠という字と隣り合わせなのです。……民間の俗諺に「人は怖い为天は怖くない」と申しますが、天が怖くないという時点で、その人は支えるものを失ってしまっているのです。これは天の応報があらたかだということではなく、他人の目は欺けないということです。というのも、実直でない人は、心の持ちようが刻薄で、他人に対し、たとえ気前よく千両を送ったり、或いはへりくだって謙虚そうに接したりして、一見鷹が鳩に見えたとしても、その実、二つの鷹の目が光っているのです。この譚紹聞は、行いが悪く、家の財産を失ってしまったとはいっても、刻薄さに至る境界を踏み越えることはありませんでした。もし刻薄の二字を犯してしまったら、循良の風規、孝順の血脈を切り取ってしまうことになるのです。どうしてそこから、生命が芽生え育ってゆくことができるでしょうか。幸いにこの瓜は、皮殻を虫に食べられてしまったとしても、胡麻のような小さな芽は傷つけられることはありませんでした。それゆえ、のちにこれを土に埋めれば、蔓は伸び花は咲いて、洋々たる前途を展望することになったのです。（第八七回）

このような説教は、文学的には無用のものかもしれないが、書香の伝統の最後のよりどころを「老実」に求めようとする著者の主張は、やはり切実なものとして読者の胸を打つ。世渡りのうまい道徳的ニヒリストでは結局だめなのだとということである。むろんこれが、当時の紳士層の身分感覚を代表するわけではないが、少なくともこのような考え方が、身分感覚の一つの極として地方知識人層の間に存在したということはいえよう。

### (3) 義僕王中——主・僕関係

本小説の義僕王中に関する部分が明末の「義僕物」の流れを汲むことは既に指摘されており、明末の短編小説集『型世言』に収録された「靈台山老僕守義 合溪県敗子回頭」などいくつかの種本が挙げられている（劉洪強2010等）。「義僕物」の主眼は、無学な奴僕の道徳性を称揚し、その賤民としての社会的地位と人格の高潔さとのずれを強調することによって、官僚・知識人の墮落や偽善に警鐘を鳴らすところにある。本小説もその枠組みを出るものではないが、明末の「義僕物」短編小説と異なり長編小説であることもあって、義僕王中をめぐる周囲の人々の性格も丁寧に描かれ、様々なエピソードの伏線も巧妙に敷かれ、単純なパターン化を免れている。ここでは、「主僕関係」に関わる側面と、「良賤関係」に関わる側面とを取り上げて考えてみよう。

譚孝移は臨終の際、王中に対し「私が死んだら大相公（紹聞）をお前に預けるので、成人するまで面倒を見てやってくれ」と遺言して亡くなったため、王中は奴僕でありながら、紹聞にとっては亡き父の代理人とでもいふべき存在であり、王中が紹聞を諫める際も、父親の遺言が持ち出される。

王中「大相公、本当のところ私は、相公に盛家・夏家に行ってほしくないのです。……大爺（孝移）がお亡くなりになった際の遺言を、相公はまさかお忘れではありませんまい。書物を読まなくなったことはさておき、彼らの中に一人としてまっとうな人がいますか？相公

が彼らと交際なさったら、将来必ず大損をしますよ。」この言葉は、紹聞を激怒させました。……王中の言葉を聞いて紹聞は顔が赤くなり、心中恥ずかしくなったのです。恥ずかしさが浅いものであれば嫌な気がするだけで、深いものであればそれは怒りとなります。……紹聞は怒り狂って言いました「王中、お前は僕に指図するのか。お前は心の中では家を出たがっているのだろう。僕のしたことはそりゃ間違っていたさ、でもお前がそれを見過ごせないというのだったら、出ていけばいい。……」王中「もし私が出て行きたがっているなら、こんな話はいたしません。私は相公が正しい道を歩むように、大爺のご苦心に背かないようにしていただけなのです。」紹聞は声を荒らげて言いました「どうせ僕は生まれつき、ご立派な人間じゃないんだよ。お前は今、大爺の話を持ち出したが、子供が大きくなれば親の言うなりにはならないもので、父上だって僕に指図はできないんだ。ましてやお前は一介の奴僕に過ぎないじゃないか！」（第三二回）

このような叙述は、単に放蕩息子が自分に従わない奴僕を叱りつけるというよりは、奴僕の言う方が正論であることを知ってこそその怒り、即ち、自分が奴僕以下の人間であることへのいらだちである、という点で、一般の義僕物と比べてより複雑な構図を示しているといえよう。譚紹聞は王中の道徳性に対する認識を読者と共有しているわけで、だからこそ、譚紹聞に対するある種の共感が生まれるのである。

王中の奔走により紹聞が訴訟事件から免れた際、孝移の友人たちは集まって王中を褒めたたえた。

（孔述経は）王中の見識に敬服し、また王中の忠義の真心に感動して言いました「譚孝移は実際、よき忠僕を育てたものだ！」惠養民「……この王中は譚紹聞に過ちを改め正しい道に進むよう勧めており、まことに賢人が

下位に隠れているという好例です。」……程希明「王中はこのような優れた人物なのに、我々がいつも彼の名（諱）を呼んでいるのは、さしさわりがあるね。まして彼は年もとっているのだから、我々皆で彼にひとつ字を贈ってやろうじゃないか。……彼のこうした優れた点は、純粋に忠義を尽くした古の臣下といってもこれに過ぎるものではない。……王象蓋（忠臣を蓋臣という。『詩経』から）と呼んだらどうだろう。」王中は跪いて言いました「私のような小人にとってとんでもないことです。」蘇霈は助け起こして言いました。「名は実に副うというものだよ。お前のような優れた者は、誰が軽んじるものか。」程希明「今後、当人がいるところでもいないところでも、王中と呼んだ者には、罰として宴会の費用を出させるぞ。」（第五五回）

諱のほかに字を持つということは、士大夫らしさの一つの表徴である。庶民でも字をもつ人はいるが、それはやはり士大夫に準ずるステータスを意味する。むろん自分で字を作っても誰もそれを呼んでくれないなら意味がないが、この場合はれっきとした士大夫たちが王中に字を贈り、皆で王中の字を呼ぶわけで、それは他の人々にも王中の地位を認知させることとなる。そうして王象蓋という呼び名が一般化してくれば、それは本来賤民である王中の社会的地位の実質的上昇に他ならない。王中に字を贈るという行為は、単なる名称の問題ではなく、名と実の相互作用を通じての王中の社会的地位の引き上げであり、当時の人々は、呼称のもつそうした作用を熟知していたのであった。

譚紹聞が息子の箕初とともに生員となり、譚家再興が軌道にのってきた際、王中の功労に報いるため、王中の娘と箕初を結婚させるという話が持ち上がる。しかし本小説では、それが実現するというすっきりした結末になるわけではない。第一〇三回、紹聞が箕初の結婚について、友人の盛希瑗（盛希僑の弟）に相談するくだりを見てみよう。

盛希瑗「王中は誠に奴僕中の最高の人物です。……将来彼の子孫は決して奴隷と見なされるべきではありません。もし代々奴僕のままにしておくとしたら、それは我々に良心がないというものです。あなたはわかってくれますよね。」紹聞「私もむろん以前からそう思っていました。この人の……娘はしとやかで質素、落ち着いていて、一束の青菜のようなのです。私は彼女を息子の嫁にしたいのですが、……ただ心配なのは、この結婚が成立したら、他人が『良賤間の婚姻は法律違反だ』などと言いつきませんかということなのです。……」

希瑗は、賢い女性なら名家の娘で愚かな者よりずっとよい、と言うが、紹聞は、譚紹衣から姻戚の娘を箕初の妻にという縁談も来ていることを話す。

希瑗「……それなら、王中の娘は息子さんの側室にするしかありませんね。あなたが『良賤間の婚姻は法律違反だ』と言われることを心配しているなら、この（譚紹衣からの）縁談を進めたらよいでしょう。」紹聞「王中が承知しないかもしれませんね。」盛希瑗「王中が娘を妾にするのを承知しないということですか。」紹聞「そうではありません。この王中という人は奴僕中の大徳家ですから、もし彼の娘が私の嫁になると、亡き父と対等の姻戚になってしまうと思うでしょう。その事自体がだめだというわけではありませんが、心が落ち着かないでしょう。それを思うと、彼につらい思いをさせるに忍びなくなるのです。」

希瑗は「それではもし嫁入りの際に王中が惜別の涙を流したら、定めし君は（新婦に）『轎を下りて帰りなさい、父上があなたを手放したくないようなので、私は人につらい思いをさせるに忍びないのだ』と言うことでしょうね。」と紹聞の優柔不断ぶりをからかうが、結局、箕初の正妻は譚紹衣の姻戚の薛全淑、そして側室が王中の娘という



ことになる。王中の人格が優れているという点について本小説は全面的に認めているが、しかし、奴僕の道徳性は、奴僕の分を守るという点にも存する。そこに義僕論のパラドクスがあるともいえよう。その結果、本小説の結末は、ハッピーエンドとしては、やや微温的なものになっているのである。

#### (4) 市井の遊民・無頼——良・賤関係

王中はむろん法的には賤民であるが、実質的人格という点からいってむしろ並の士大夫よりも優れている、ということが、本小説に登場する良識人たちの一致した見解であった。しかし、譚紹聞の遊蕩仲間である市井の賤民については、その「賤性」について問題化する姿勢は必ずしも見られない。いくつかのエピソードを挙げてみよう。

第三〇回、裁判に巻き込まれた紹聞の家に、皂役（役所の捕り手、賤民）や保正（地域の治安係）がやってくる。

紹聞は酒と肴を持ってくるよう命じ、王中が間もなく酒と肴を持ってきました。……（保正の）王少湖はわざと（皂役に）「談班長、苗字はどんな字を書くのですか」と聞きました。皂役「私は小さい時半年だけ字を勉強したことがあります、言偏に炎という字だったのを覚えています」。……姚皂役「というと譚相公と同族ですね（談と譚は発音が同じ）。」談皂役「お引き立てにあずかろうとは思っていませんよ。」姚皂役「まあ遠慮しないで。王大哥（王兄さん）、夏大哥、私は杯を挙げて二人に一家のちぎりをさせようじゃありませんか。」……譚紹聞は今が（裁判の行方にとって）大事な時だとわかっていたので、面と向かって良賤の分を言い出すわけにもいかず、また「譚」と「談」とは違う字だと指摘するわけにもいかず、出まかせに「それはいいですね」というしかありませんでした。……談皂役は……紹聞を見て「我々はすでに一家になったのだし、あんたは私よ

り年下なので、私はあんたを『賢弟』と呼ぼう。賢弟、もう一本熱燭をつけてくれ。お客様に返杯をしなくては。」紹聞は王中に言いつけて……燭をつけさせ、王中は口ではすぐ返事をしましたが、あにはからん、王中は（ショックのあまり）体の気の半分がたは冷たくなっていたのでした。

第三三回には、譚紹聞が張繩祖の賭場で知り合った白興吾という人物に金を借りたが、泥酔してその金を忘れてきてしまい、翌日、白を訪ねる場面がある。

紹聞は門の外に来ましたが、人が出てこないで、一声「白大哥（白兄さん）！」と叫びました。（妻が出てきて、外出していると言う。）紹聞「白大嫂（白姉さん）、それでは帰ってきたら白大哥に伝えてください。」

そこに張繩祖がやってきて言うには、

「あれはうちの代々の奴僕で、名は白存子というんです。下女をめあわせてやりましたよ。……どうしてあんたは奴を大哥なんて呼ぶんです？」……紹聞はここではじめて、白興吾が奴僕だったということを知りました。昨日酒を酌み交わしたことや、今日、兄さん姉さんと呼んだことを思い出すと、顔が真っ赤になりました

張繩祖は譚紹聞を家に誘い、紹聞が断ると「あんたは朝っぱらから下僕を訪ねてきたのに、その下僕の主人に会ったら、つきあいたくないとおっしゃるわけだね。あんたが一緒に来なければ、私は明日、町中の人に、あんたは下僕の白存子の兄弟だって言いふらしてやるよ」と脅迫する。弱みを握られた紹聞は赤面して、言うことを聞くほかなかったのがあった。

これらはいずれも、賤民と「一家」「兄弟」的關係を結ぶことが（知らずに兄と呼んだだけでも）、士大夫の体面を傷つけるものと見なされていたことを示している。しかし市井の遊民社会では、こうした義兄弟關係こそが、社会的結

台の主演をなしていた。紹聞は、道楽息子の盛希僑や無頼漢の夏鼎と義兄弟関係を結んだことをきっかけに、賭博や芝居など、道楽の世界に引きずり込まれてゆく。失うものない遊民・無頼たちは、夏鼎のあだ名である「兎児絲（ネナシカズラ）」のように、良家の子弟にからまりついて彼らを食い物にする。庶民の上に立つ「士」から、社会の底辺にうごめく「賤」に至る道は、すべりやすい斜面のように歯止めがない。『岐路灯』は、そのようなすべりやすさを驚くべき詳細さで生き生きと描くが、こうした遊民・無頼の社会を単純な悪の温床としてのみ描いているわけではない点も、本書の特色である。この「すべりやすい坂」は、陰險な詐欺や嫉妬・害意に満ちていると同時に、それなりの情誼や助けあいも存在する、複雑な人間社会である。紹聞が知県として赴任する際の描写で著者が「この譚紹聞は浮浪場中で様々な経験をしつくし、辛酸も嘗めつくしてきたので、今回官となって初めて着任するに際しても、世の俗吏のように下品なおごり高ぶった態度を見せることはありませんでした」（第一〇五回）と述べているのは、遊民・無頼の世界に対するこの小説の複雑な視線を表しているといえるだろう。

## 5. おわりに

最後に、『岐路灯』に見える身分感覚の特質をもとに、同時代の他地域との比較の論点を提出してみたい。『岐路灯』を読んで我々が第一に感ずるのは、社会的な地位というものが、人々の相互の行為によって絶えず浮動しているという感覚である。王中の字のように意識的にある人物の社会的地位を動かそうとする場合もあれば、奴僕を「兄さん」と呼んでしまった不慮の一言で苦しい立場に追い込まれることもある。呼称や振る舞いといったそれ自体は些細な行為が、社会的認知を通じて波及し、身分的位置づけへとつながってゆく。そのなかで地位の落下を防ぐためには、徹底

的に身を慎み、「正人」とのみ交際すべきだ、といった譚孝移のような堅い考え方も出てくるわけである。『岐路灯』はむしろフィクションではあるが、読者がそうした感覚を共有していればこそ、これらのエピソードが意味を持ち得るのだろう。

第二に、人格的徳性と社会的地位とのずれが絶えず意識されている社会だということである。義僕は賤民でありながら時に士大夫以上の人格者として称揚されるが、それは士大夫・官僚の偽善性が絶えず糾弾の対象となることと表裏をなす。こうしたずれの意識は、中国の身分制度自体が不安定であることを示すと見なされるかもしれない。しかしむしろ、個々の人物についてずれが意識されるということは、真の道德性が社会的上下関係の基準となるべきだという身分制理念の根幹については誰も疑っていない、ということの裏返しである。こうした基準あればこそ、人々はその基準に基づいて盛んに人物月旦を行い得るのである。

今回は比較の素材を提出したのみで、実際に比較史的な議論を行うことはできなかったが、今後はこれらの素材をもとに比較史的議論を深めることを課題としたい。

## 注

- 1 以下、『岐路灯』の著者や出版状況に関する基礎情報は、樂星編著『岐路灯研究資料』による。
- 2 例えば、『岐路灯』自序では、三国志演義、水滸伝、西遊記、金瓶梅といった「四大奇書」を、風俗を乱すものとして批判し、それに対比して「忠孝節烈を描き出し、善い者は千古に名を残し、醜い行いをする者は身を滅ぼすことを示して、読者の笑いや涙を誘い、樵や牛飼い、料理婦や召使をも感動させ」ることを本書の目的として標榜している。ただ、これをどの程度顔面通り取るべきかについては、慎重であるべきだろう。

## 参考文献

- 李緑園著 樂星校注『岐路灯』全3冊、中州書画社、1980。  
樂星編著『岐路灯研究資料』中州書画社、1982。

- 『岐路灯論叢』(一)(二)、中州書画社、1982、1984。
- 李延年『《岐路灯》研究』中州古籍出版社、2002。
- 劉暢『《岐路灯》与中原民俗文化研究』齊魯書社、2009。
- 徐雲知『李綠園の創作觀念及其《岐路灯》研究』中国社会科学出版社、2010。
- 劉洪強「《岐路灯》藍本問題考辨——兼論《型世言》与《岐路灯》之關係」『天中学刊』2010年2期。
- 小山裕之「『岐路灯』に見える諸戯曲について」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』3、2000。
- 辻リン「『岐路灯』における「勸世」の姿勢——『金瓶梅』との関わりを通じて」『中国文学研究』29、2003。
- 辻リン「道楽と改心——岐路に立つ『岐路灯』の文学」『中国文学研究』30、2004。
- 岸本美緒『明清交替と江南社会——17世紀中国の秩序問題』東京大学出版会、1999年。
- 同「明清時代の身分感覚」森正夫他編『明清時代史の基本問題』汲古書院、1997年。
- 同「『老爺』と『相公』——呼称から見た地方社会の階層感覚」山本英史編『伝統中国の地域像』慶応義塾大学出版会、2000年。
- 同「清代における『賤』の觀念——冒捐冒考問題を中心に」『東洋文化研究所紀要』144、2003年。
- 同「明代の社会集団と『賤』の觀念」井上徹他編『東アジア近世都市における社会的結合』清文堂出版、2005年。